

久場千恵さん

1929(昭和4)年月日生まれ
沖縄県今帰仁村(なきじんそん)
日赤看護婦

所属 第62師団野戦病院
戦地 新川(ナゲーラ壕、南風原町)
～米須(現糸満市)



●1945(昭和20)2月、第62師団野戦病院配属

那覇の県立沖縄病院の付属看護婦養成所で教育を受けていたが、10・10空襲で県立病院が焼けた。12月ごろ、軍から爪と毛髪を切ってくるように言われていた。それを知った親に「行かないでほしい」と言われた。

首里のナゲーラ壕に、養成所から5名配属。米軍が上陸して戦闘が始まると、嘉数高地やシュガーローフ(安里52高地)から負傷兵がたくさん送られてきた。麻酔がなくなったので麻酔なしで腕や手足を切断していた。手足を切る時は皆で負傷兵を抑え込む。負傷兵は断末魔のような悲鳴を上げる。

顔面の皮膚が剥がれた負傷兵がいて「水をくれ、水をくれ」と言う。軍医は「今水を飲まずと死ぬぞ」と言い、剥がれた皮膚を丁寧に縫い合わせていった。縫い合わせ終わって「ああよかった」と思っていたら、その負傷兵は頭がおかしくなっていたのか、縫い合わせた皮膚を全部剥がしてしまった。「水をくれ水をくれ」と騒ぐしどうしようもなかったが、結局亡くなってしまった。どうせ亡くなるなら水ぐらい一杯飲ましてあげればよかったのにと思った。

自決用の手榴弾を貰ったこともあったが、2、3時間後に兵器が不足しているからということで返すことになった。

●1945(昭和20)年5月、南部の米須の壕に移動命令が出される

午前2時ごろ、南部への移動の第1班として、衛生兵と同僚数名で壕を出て向かおうとしたところへ米軍が攻撃してきた。同僚の喉に砲弾の破片が命中し、一言も言わずに倒れた。「起きて！」と言っても起きず、即死だった。喉を見てみると破片が入った穴は小さかったが、出て行った後頭部にはものすごい大きな穴が開いていた。その後、もう一人の同僚の腸チフスが悪化して動くことが出来なくなってしまった。同僚は「いいから私を置いていって」と言うが、「それではいけない」とみんなで説得して、結局看護婦長が抱いて南部まで連れて行った。

移動の途中、ひめゆりの壕の反対側にあった壕に避難して入った時に、同僚で右手をやられた人が先に入っていた。壕にたどりついてやっとほっとしたと思っているときに、衛生兵が注射器を持ってきて同僚に注射するように頼んだ。すると知り合いの看護婦さんが「やっちゃだめ」と言ってきた。なんでやっちゃだめなのか聞くと「あれはモルヒネで毒殺するつもりだからやらないほうがいい」と言って止めてくれた。

野戦病院は米須の壕を使うことになっていたが指定された壕に行ってみると、壕には山部隊(24師団)の兵隊が先に入っていた。それから同じ軍人同士で口論が始まり、とうとう拳銃を抜き始めた。すると、それを遠くから見ていた軍医が「お互い日本人じゃないか。もう少し紳士らしくやろうじゃないか」と大声で叫んだ。それで口論が収まった。

●1945(昭和20)年6月19日 石部隊野戦病院解散

野戦病院の解散を他の壕に入っていた同僚達に伝える行く途中で、前線に向かう父親に会った。父親は今帰仁から防衛隊として南部にやってきていが、そのことは知らなかった。葉っぱで偽装して軍服を着た父親は自分を見て呆然と立ち尽くし涙を流した。それから「この時局だからもうしかたがない。体に気を付けて行けよ」といって前線へ行った。それまでは家族に会いたいとか家族の事を考える余裕はなかったが、父親に会ってから家族のことが心配になった。父親の涙は初めて見た。私もしくしく泣いた。縁起が悪いから泣くなと言われても涙が止まらなかった。

野戦病院が解散してからは山城の壕に行けということだったが、父親を探して回っていた。少しでも声が聞こえると「今帰仁の方ではないですか」と訪ねて歩いた。同僚とも離れ離れになって一人になっていた。

ほとんど食事もしなかった。乾麺麩を舐めて生き延びて居たようなものだった。ソテツから団子をつくって食べていた。嫌いだったけれど、これで多くの人が助かった。米軍機がカレーなどのおいしそうな食べ物の絵をカラー刷りで印刷したビラを撒いていた。これはおなかの空いた者にとってはものすごい戦力だった。

海のほうから水陸両用戦車が轟音を立ててやってきてひき殺されそうになったが、なんとか見つからなかった。

行くところがなく、米須海岸近くの畑の中に寝転がっていたところに、米兵がやってきた。米兵は死んでいると思ったのか誰も見向きもしない。そうこうするうち、風が吹き持っていた救急袋の中身がこぼれたので、それを拾おうとちょっと動いたのが見つかり捕虜に。

(取材日:2011年2月8日)